

今日のトピック 原油市場の2018年の振り返りと19年の見通し 減産合意が遵守されれば、価格は堅調な展開へ

ポイント1 年末にかけ急落した原油価格 年初来では約15%の下落

- 2018年の原油価格は、北米の代表的な指標であるWTI先物価格で見て、年初1月2日の1バレル当たり60.37ドルから10月3日の同76.41ドルまで上昇しましたが、これを当面のピークに下落に転じ、11月下旬以降は同50ドル近傍で推移しています。12月12日の同51.15ドルまでの年初来では、15.3%の下落となりました。年間の騰落率がマイナスとなれば、15年以來3年ぶりとなります。

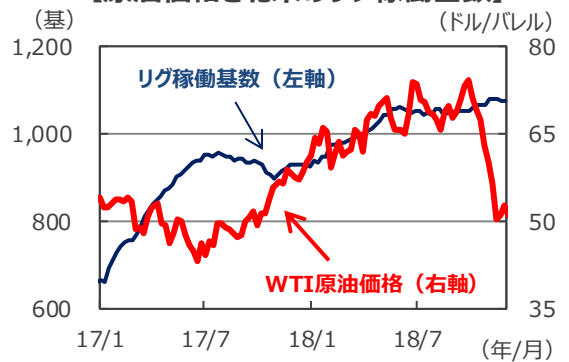
ポイント2 主要産油国は減産で合意 日量120万バレル減産へ

- 原油価格下落の要因は、米中貿易摩擦による中国経済の減速と、それに伴う原油需要の減退が懸念されたこと、石油輸出国機構（OPEC）加盟国や米国で生産が拡大していること等です。
- 価格下落に対して、OPEC加盟国にOPEC非加盟の主要産油国を合わせた「OPECプラス」は12月初旬に開催した会合で、日量120万バレル規模の減産を実施することで合意しました。この減産は、19年1月から当初6か月間で行われる予定です。

今後の展開 19年は堅調な展開を予想

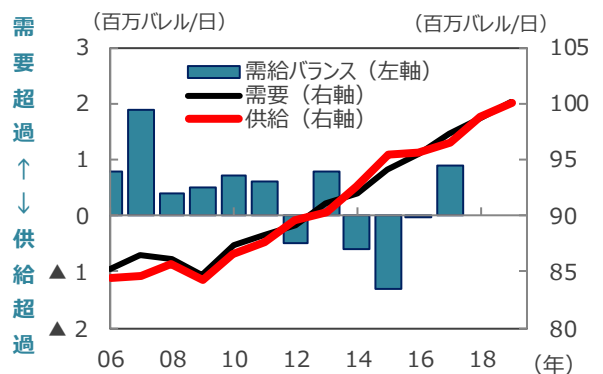
- 原油需要は、中国やインドを牽引役に今後、緩やかな増加が見込まれます。OPEC月報の18年12月号によれば、18年の原油需要量は世界全体で日量9,879万バレル、前年比1.5%増、19年は同じく1億バレル、同1.3%増と予想されています。ただし、米中の通商・ハイテク摩擦の激化が実体経済の減速を招き、原油需要を下押しするリスクには注意が必要です。

【原油価格と北米のリグ稼働基数】



(注) データは原油価格が2017年1月6日～2018年12月12日。リグ稼働基数が2017年1月6日～2018年12月7日。ともに、週次データ。WTIは原油価格の代表的な指標のひとつ。
(出所) Bloomberg L.P.のデータを基に三井住友アセットマネジメント作成

【世界の原油需給動向】



(注1) データは2006年～17年が実績。18年、19年は需要がOPEC予想、供給は需要と一致するとの仮定のもとで弊社算出。

(注2) 需給バランス=需要-供給。

(出所) OPEC月報のデータを基に三井住友アセットマネジメント作成

- 一方、原油の供給量は18年1～9月実績で日量9,833万バレルと需要量を下回りました。輸送能力の限界等から、米国シェールオイルの大幅な増産が困難な状況にあることを踏まえると、「OPECプラス」の減産合意が遵守されれば、原油需給は改善し、価格も安定に向かうと予想されます。

ここもチェック! 2018年12月12日 吉川レポート (2018年12月)
2018年12月11日 OPEC、大規模『減産』を実施へ

■当資料は、情報提供を目的として、三井住友アセットマネジメントが作成したものです。特定の投資信託、生命保険、株式、債券等の売買を推奨・勧誘するものではありません。■当資料に基づいて取られた投資行動の結果については、当社は責任を負いません。■当資料の内容は作成基準日現在のものであり、将来予告なく変更されることがあります。■当資料に市場環境等についてのデータ・分析等が含まれる場合、それらは過去の実績及び将来の予想であり、今後の市場環境等を保証するものではありません。■当資料は当社が信頼性が高いと判断した情報等に基づき作成しておりますが、その正確性・完全性を保証するものではありません。■当資料にインデックス・統計資料等が記載される場合、それらの知的所有権その他の一切の権利は、その発行者および許諾者に帰属します。■当資料に掲載されている写真がある場合、写真はイメージであり、本文とは関係ない場合があります。